

---

# スズメバチ退治

百々 佑利子

---

## はじめに

小文では、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス *Through the Looking Glass*』(1871) からゲラ刷りの段階で削除された短い挿話『かつらをかぶったスズメバチ *The Wasp in a Wig—A “Suppressed” Episode of Through the Looking-Glass and What Alice Found There*』(1977) について、(1)刊行の経緯、(2)スズメバチの登場まで、(3)スズメバチとアリス、(4)スズメバチ退治、の順で分析を試みたい。削除の必然性が、キャロルの「詩」に関わる二つの原則と関連していることを考察していく。

### (1) 刊行の経緯

ルイス・キャロル(Lewis Carroll; 本名Charles Lutwidge Dodgson, 1832-1898) 作『鏡の国のアリス』は、『不思議の国のアリス *Alice’s Adventures in Wonderland*』(1865) から6年後の1871年(奥付は翌年)に Macmillan London Ltd.から出版された。それから約100年後の1974年に、「鏡の国」のために書かれ、ゲラの段階で挿し絵画家との協議によって削除された幻の挿話、キャロルの甥 Stuart Dodgson Collingwood が伝記 *The Life and Letters of*

Lewis Carroll (1898) の中で言及している「削除された章」<sup>1)</sup>のゲラ刷りが見つかった。「不思議の国」と「鏡の国」の挿し絵画家である John Tenniel は手紙の中で、本挿話を「鏡の国」から削除するようかなりきっぱりと提案している<sup>2)</sup>。

...Don't think me brutal, but I am bound to say that the 'wasp' chapter doesn't interest me in the least, & I can't see my way to a picture. If you want to shorten the book, I can't help thinking—with all submission—that there is your opportunity...

これではキャロルもスズメバチの挿話を引っ込めざるを得なかった。テニエルは、キャロルの注文の多さに辟易して『鏡の国のアリス』の挿し絵も渋々引き受けたというから<sup>3)</sup>、キャロルとしてはテニエルの意見を尊重せざるを得ない状況だったのだろう。そしてゲラ刷りはしまい込まれた。

キャロルは長年オックスフォード大学クライスト・チャーチ学寮に居住していたが、そこで使っていた家具や蔵書等が、キャロルが死去した年にオークションにかけられた。しかしマクミランのファクシミリ版で、本挿話の出版の経緯を述べた中に、当時のカタログにこのゲラ刷りの記録はなく、「その他の雑物」とでもしてひとまとめに買われた中<sup>4)</sup>にあったらしいとある。しかしキャロルが削除したゲラ刷りを破棄しなかったのは現物が存在することからも確かであり、誰かが購入したゲラ刷り等を大切に保存していたのもまた確かである。

100年経ってゲラ刷りがふたたび世に出た。1974年にサザビーズのオークションにかけられたのである<sup>5)</sup>。そして所有者の好意とコピーライトの所有者の協力<sup>6)</sup>を得て、The Lewis Carroll Society of North America の出版委員会がゲラ刷りの刊行にこぎ着けた。1977年に当学会員のために、チャップブック版500部とデラックス版750部が印刷され、同年「鏡の国」のマクミラン社から、『かつらをかぶったスズメバチ』として出版された。こうして幻のスズメバチの挿話は、全世界のキャロリアンの目に触れることになった。

マクミラン版は、A5判のハードカバーで、全40ページの薄い本であるが、Martin Garner<sup>7)</sup>による序文、1870年6月1日付けの挿し絵画家テニエルのキャロル宛の手紙のファクシミリ版<sup>8)</sup>、そして本文が同じく M. ガーナーの注釈付きで9頁にわたり掲載されている。最後に、ゲラ刷りのファクシミリ版が添えられている。ゲラ刷りには、63頁 (slip) の一部、64—67頁は全文、そして68頁の一部を削除されたしという旨のキャロルの手書きの指示が書き込まれている。

## (2) スズメバチの登場まで

ゲラ刷りのファクシミリ版<sup>9)</sup>を見ると、当初キャロルは、スズメバチのエピソードを、*Through the Looking Glass* の8章 “It’s My Own Invention.” の最後に入れるために書いた。8章においてアリスをスズメバチと遭遇させる構想があったわけだ。そこへ至るまで、つまり本挿話を執筆するまで(「不思議の国」及び「鏡の国」の8章終わり近くまで) 作者はノンセンシカル・ファンタジーを支える柱を何本かたてているが、その中の重要な2本の柱、創作された詩のパロディー化と伝承童謡の尊重を比較のために見ていきたい。そこにスズメバチ登場(あるいは退治)の必然性が浮かび上がってくるだろうか。

8章までの粗筋は割愛するが、Looking-Glass House に入ったアリスが、The Garden of Live Flowers で the Red Queen に従って小さな丘に登り、a most curious country<sup>10)</sup>が眼前に広がっているのを見たことは述べておかなければならない。それは小川と生け垣で文字通り碁盤の目に区切られた土地であった。賢いアリスは即座にこれは大きなチェス盤であり、世界が一つのチェス盤になっているのを見抜く。チェス盤ならば駒がある筈で、目敏くアリスは駒を認めた。となれば常に前向きに行動するこの少女は、pawn でいいから駒になりたい、でもできれば最高位(少なくとも女という性における最

高位) であるクィーンになりたいと願いを口にする。すると赤のクィーンはあっさりとはまず白のクィーンのポーンになりなさい、やがて the Eighth Square に入ればクィーンになれると請け合う<sup>11)</sup>。ここでアリスと赤の女王はいきなり手に手を携えて猛然と走り出し、アリスのチェス盤を進む道程が始まるのである。

小川を越える度に新たな柁目に入りアリスがクィーンになる時が近づくわけだが、道程はアリスの不安や驚きといったネガティブな感情に揺さぶりをかける出会いに満ちていた。山羊と汽車に乗り合わせたり、森で子鹿に警戒されたりしつつ (3章)、“It’s only a brook we have to jump over.”<sup>12)</sup> とはいえ、決然たる覚悟と時に応じ相手に応じる柔軟性をもつアリスにして初めて可能な旅路であった。2冊の「アリス」の大小様々の登場者達とのノンセンシカルな問答は、少女アリスの成長、クィーンにふさわしい資質を身につけるために必要な通過儀礼的な困難と言い換えてもいいだろう。「不思議の国」では脈絡の無い出来事が連続して起こり、物語自体がノンセンスそのものであった。「鏡の国」ではチェスの盤を進んでいくという目的意識がアリスにある。その目的に沿った行動の過程で、アリスは数々のノンセンスに出会っていくのである。スケールを測ればノンセンス自体が舞台である第一作のほうが、ノンセンスを散りばめた第二作よりも大きい。

普遍的に多くの児童文学は、主人公や準主人公達の人間的な成長や、困難を切り抜けながら獲得していく、あるいは世界の見聞を広めていく過程を描く。読者に代償体験を得させ、読者と共感を分かち合い、かつ質の良い娯楽を提供していくのが児童文学である。途方もないノンセンスの世界であっふあっふする代償体験は、どちらの作品でも可能だが、目的を呈示しない第一作の世界は、無条件で全てを包含し得るから雄大である。第二作では、常識的な(目的を持って進んでいく)行動とノンセンスにさらされる場面とを繰り返す。その行ったり来たりをしなければならぬ細かい作業のうちに、力強さが失われかねない。スズメバチの挿話は、第二作の12章あるうちの第8

章に、アリスがクィーンになれる 8 桁目に移る直前に入れられるべく書かれた。つまりこの時点で、アリスはクィーンに求められる人格に限りなく近づいていなければならない。その意味で、キャロルが削除はされたが、アリスの資質をどのように描いていたかを、挿話は解き明かしてくれる筈である。いやアリスは成長などという現世的な人生の過程を拒絶しているのかもしれない。夢が覚めればもともとあったところに戻るというパターンが採用されているのかもしれない。あるいは既存の価値観を引きずりおろすという破壊が加速されているかもしれない。この点を明らかにするために、物語の当時の聞き手達（読者）が馴染んでいた詩と、同じく親しんでいた伝承童謡に対する扱いの差違を検証したい。

キャロルは、当時ヴィクトリア朝の大人達が子ども達に与えた教訓詩の幾つかを 2 冊の「アリス」でパロディー化した。それと対照的に、引用されている伝承童謡のノンセンスな歌詞は変えていない。教訓詩が頼みとする *moderation* に対するキャロルの批判精神を、読者はパロディーに読みとることができる。ではまず教訓詩の隅石の一つ、18世紀初めから定着していた 20 箇条に及ぶ教え‘The School of Manners’を見てみよう。

Fear GOD.

Honour the KING.

Reverence thy Parents.

Submit to thy Superiors.

Despise not thy inferiors.

Be courteous with thy Equals.

Pray daily and devoutly.

Converse with the Good.

Imitate not the wicked.

Hearken to Instruction.

Be desirous of Learning.

Love the School.

Be always cleanly.

Study Vertue.

Provoke no Body.

Love thy Schoolfellows.

Please thy Master.

Let not play entice thee.

Refrain thy Tongue.

Covet future Honour, which only Vertue and Wisdom can procure.<sup>13)</sup>

この精神のモチよりの奨めに誤りを発見するのは難しい。宗教的あるいは歴史的な関わりを除けばいつの時代でも通用させたい正しい教えのように思える。古き良き教えの喪失感を回帰させられる条もある。しかし1章に続く個々の詳細な規則を見ていくと、子どもに対して例えば嘘に近い振る舞いも時にせよといたげな強引な教えのあることが分かる。例として Rules for Behaviour in Discourse の章から幾つかを取り上げる。小文の目的から外れるので分析結果は別の機会に明らかにするが、結論だけ言えばこれらの教えは、「不思議の国」でも「鏡の国」でも、アリスが会うもの達がことごとく「実践していない」あるいは殊更「無視している」ものばかりなのである。

Among Superiors speak not till thou art asked.

Speak neither very loud nor too low.

Strive not with Superiors in Argument or Discourse, but easily submit thine opinion to their assertions.

If thy Superior be relating a Story say not, I have heard it before; but attend as if it were to the altogether new; seem not to question the

truth of it; if he tell it not right, snigger not, nor endeavour to help out or add to his relation.

Boast not in discourse of thine own wit or doings.

Beware thou utter not any thing hard to be believed.

Use not any reproachful Language, or contemptuous, to any person, though ever so mean, or inferior.<sup>14)</sup>

こういった厳しいしつけが実践された階層(当時の文字が読める「読者層」)の子ども達にとって、「アリス」の出会いから得られる代償体験が、精神的な破壊体験に近いものであり得たろうと想像できる。先に述べたように、「アリス」の物語のキャラクター達がことごとくこの教えにそむいていることがその証の一つである。

次にパロディー化の実例を、元の詩、キャロルのパロディーの順で挙げる。

‘Speak gently!’ by David Bates (1849)

Speak gently! It is better far

To rule by love than fear;

Speak gently; let no harsh words mar

The good we might do here!

Speak gently to the little child!

Its love be sure to gain;

Teach it in accent soft and mild;

It may not long remain. (1st & 3rd stanzas).<sup>15)</sup>

‘Speak roughly to your little boy’ (Pig and Pepper, *Alice’s Adventures in Wonderland*)

“Speak roughly to your little boy,  
And beat him when he sneezes :  
He only does it to annoy,  
Because he knows it teases.”

Chorus

“Wow! wow! wow!”<sup>16)</sup>

‘Beautiful Star’ (popular song)  
Beautiful star in heav’n so bright,  
Softly falls thy silv’ry light,  
As thou movest from earth afar,  
Star of the evening, beautiful star.

Chorus

Beautiful star,  
Beautiful star,  
Star of the evening, beautiful star.<sup>17)</sup> (continued)

‘Beautiful Soup’ (The Lobster Quadrille)  
Beautiful Soup, so rich and green,  
Waiting in a hot tureen!  
Who for such dainties would not stoop?  
Soup of the evening, beautiful Soup!

Beau—ootiful Soo—oop!<sup>18)</sup> (continued)

前者はマナー読本の会話の項の教えにぴたりと沿った詩である。後者はアリス達が無邪気にキャロルに歌って聞かせた流行歌である。キャロルの、い<sup>19)</sup>

ずれは名作の地位を勝ち得た作品も、出版直後は子どもにも大人にも爆発的に人気が出たというわけではない事実と、受け入れられたのはテニエルの挿し絵のほうが早く、キャロルのテキストの浸透はじわじわとであったという事実がある。<sup>20)</sup>これは人間の本能である破壊への怯え、あるいは用心深さの表れである。当時の子ども達が直接そして自由に本を選ぶのは上記のマナー読本の精神からいっても無理だったろう。当初の不振は保護者のほうにためらいがあって購入がなされなかったと見るべきである。子ども達の間「じわじわと」浸透していったのは、実際に読んだ子どもの支持が口伝えに広がるのに時間がかかったためだろう。その背景には、述べてきた教育風土に与えたパロディー化の衝撃の大きさが潜んでいる。

もう一つのキャロルの作品を彩る要素は、英国の伝承童謡 nursery rhymes の人気者達に血肉を与えたことである。「鏡の国」では、Tweedledum と Tweedledee (4章), Humpty Dumpty (6章), Lion と Unicorn (7章) が伝承から飛び出して活躍する。ただし既に述べたようにパロディー化された創作の詩と扱いは異なって、伝承童謡の登場人物達(動物や擬人化された卵も含めて)の特長や行き着くところ(卵の崩壊)等は伝承そのままに踏襲されている。伝承童謡の生命であるノンセンスへのキャロルの愛着、あるいは当初の聞き手達であるリデル姉妹が伝承童謡を愛唱していたことが伺える。「鏡の国」で使用された三つの伝承童謡を見ていくことにする。

‘Tweedledum and Tweedledee’

Tweedledum and Tweedledee

Agreed to have a battle,

For Tweedledum said Tweedledee

Had spoiled his nice new rattle.

Just then flew by a monstrous crow,

As big as a tar-barrel,

Which frightened both the heroes so,  
They quite forgot their quarrel.<sup>21)</sup>

‘Humpty Dumpty’  
Humpty Dumpty sat on a wall,  
Humpty Dumpty had a great fall.  
All the king’s horses,  
And all the king’s men,  
Couldn’t put Humpty together again.<sup>22)</sup>

‘The lion and the unicorn’  
The lion and the unicorn  
Were fighting for the crown;  
The lion beat the town  
All round about the town.

Some gave them white bread,  
And some gave them brown;  
Some gave them plum cake  
And drummed them out of town.<sup>23)</sup>

ダムとディーと略して愛唱されることもある童唄の主人公達は、どっちもどっち他愛ない差違を殊更大げさに示したがる二者の争いを冷笑するとき世間が引用する。確かにダムとディーの喧嘩は、玩具をめぐる砂場の争いの域を出ないし、喧嘩の意気込みもカラスがあっさり冷やしてしまう程度である。物語における二人の掛け合いも、元唄の二人の性格付けの範囲を出ない。

古くはなぞなぞであったハンプティ・ダンプティは余りに良く知られるよ

うになって、謎として通用しなくなった卵である。しかし卵が墜落して微塵に砕け復元は不可能であるという単純なこの詩は、未だに多くの謎をはらんでもいる。その元唄の本質が、アリスとの問答の質に生かされている。獅子と一角獣でもキャロルは、伝承のパロディー化を目指すことなく、忠実に伝承をなぞり、更にふくらみを増す以外の目的は持たない。

創作詩のパロディー化と伝承童謡の堅持という明確なキャロルの姿勢に合わない例もある。それは「きらきら星」のパロディー化である。Opie はこれも伝承童謡800編の中に入れていた。キャロルはここで挙げなかった「ハートの女王」や「くわの木のまわりをまわろう」も含めて、伝承童謡のパロディーは行わなかったが、「きらきら星」だけは次のようにパロディー化している。

‘Twinkle, twinkle, little star’ (原詩)

Twinkle, twinkle, little star,  
How I wonder what you are!  
Up above the world so high,  
Like a diamond in the sky.<sup>24)</sup>

‘Twinkle, twinkle, little bat!’ (パロディー)

Twinkle, twinkle, little bat!  
How I wonder what you’re at!  
Up above the world you fly,  
Like a tea-tray in the sky.<sup>25)</sup>

数々のパロディーの中でも、元唄の言葉を最大限に生かしながらきれいに韻を踏み、夜の「光と闇」を見事に対比させ茶化している点で秀逸である。しかし何故、この伝承童謡だけがパロディー化されたのか。元唄は伝承童謡

の中でも最も広く知れ渡っているものの一つであるが、またほとんどが詠み人知らずの伝承童謡の中で作者が分かっている珍しい一つでもある。作詞者は Jane Taylor (1783-1824), 1806年に出版された子どものための歌集 *Rhymes for the Nursery* の中に含まれていた<sup>26)</sup>。出版は「不思議の国」が出版される60年ほど前のことである。キャロルは作詞者が分かっているものはすべからくパロディー化の対象にしようとする原則的に定めたのかもしれない。あるいは「不思議の国」が書かれる60年位前から歌われていたものなど「伝承」として認めていなかったのかもしれない。後者とすれば他に使われた伝承童謡の起源は遙かに遡るべきものなのだろう。しかし両方を組み合わせたのが、「きらきら星」のパロディー化にキャロルがためらいを抱かなかった理由であると理解するのが自然かもしれない。物事を美化したり教えを与えようとする詩人をからかい、その作品をためらわずに壊した文学者は、一方で自文化の土壌を構成する要素の一つに多大な敬意を払っていた、というように理解できるのである。

スズメバチの挿話を書くまでのキャロルは、子ども達にたがをはめる創作詩をパロディー化し、伝承への愛着を確かめつつ歩んできた。そして少女アリスも、あと少しで、8 柙目に至る小川を越えて、いよいよ念願のクィーンになろうとしていた。8 章の最後である。

次にスズメバチの挿話の内容を検証していく。本挿話がパロディー化に見られる子どもの側に足場を置いた批判や教訓詩への嫌悪と同列にあるのか、それともスズメバチの挿話も伝承に基づいているものかを見ていかなければならない。

### (3) スズメバチとアリス

8 章の終わり（スズメバチの挿話が存在したときには、終わりではなく章の真ん中）で、章のタイトルでもある台詞、“It’s my own invention.” が口

癖の老いた White Knight と握手をして別れを告げたアリスは…A very few steps brought her to the edge of the brook. “The Eight Square at last !” she cried as she bounded across, このあと間に星印が3行並んで、アリスの目的達成の瞬間が描かれる。頭を締め付ける重いものを取ってみると、“It was a golden crown”<sup>27)</sup>。アリスはクィーンになったのである。

ゲラ刷りによれば、上記の引用の the brook と、“The Eighth Square…”との間に、スズメバチの挿話は入っていた<sup>28)</sup>。削除された挿話の粗筋は次のようである。

アリスが小川を飛び越そうとしたその瞬間、深いため息が聞こえた。その声<sup>29)</sup>があまりに unhappy に響いたので、アリスは思わず振り向いた。誰かが、木にもたれかかっている。その顔はスズメバチにそっくりだった。以後この「人物」は、スズメバチに似た老人ではなくて、スズメバチ the Wasp と書かれている。アリスはクィーンになるのが目的だったから、こんなところで(しかもスズメバチなんかを相手に)時間を潰すのはちょっと気が進まないというのが本心だ。けれども、「おお、おれの老骨よ、おれの老骨よ」と愚痴り続けるご老体を放っておくことができるアリスでは無論ない。それに、助けるのならば時は「今」しか無かった。

“If I once jump over, everything will change…”<sup>30)</sup>

チェス盤上の世界は、無常の世界なのである。アリスはその認識を保ち続けられる程には「大人」になっていた。やたらと機嫌の悪いスズメバチに手を貸し、風当たりがまだしもな側へと移らせる。けれどもスズメバチは置き去りにされるのが嫌で、アリスに絡み続ける。そこでアリスは、新聞を読んであげましょうと申し出た。注釈者のガードナーは、足下に具合よく新聞が落ちていたことをスズメバチの紙を利用する性質と結びつけて説明している<sup>31)</sup>。アリスの読んでやった新聞記事は、故意に童話的で牧歌的だ。雑なファンタジーのプロット見本みたいなものでしかない。記事は、探検隊が食料庫ツアーを試みて白砂糖の塊五つを発見したと伝えるが、スズメバチ老人の頑なな

心はこのほのほのとしたニュースにも和みはしない。あるいは、スズメバチの目はファンタジー作家キャロルの目であり、この程度のファンタジー・プロットが世間の求めるところじゃないかと、冷たい視線を向けているのかもしれない。スズメバチは、黒砂糖 brown sugar を発見しなかったとって、おかんむりである。けれどもそののち、スズメバチはやや落ち着いてきて、自分の不幸は「かつら」のせいだと打ち明けた。

この後、かつらとかつらが落ちないように黄色いハンカチで頬かむりしていることへと話が展開する。頬かむりの効用について意見は分かれた。いわく toothache や stiff-neck (Alice) によい、あるいは conceit, (to) hold up your head (the Wasp) によい。互いに相手への理解が中途半端でやり取りされ投げ出されるが、この辺りでは、キャロルらしいすれ違いの妙味が垣間見られる。スズメバチがハンカチをほどくと、下からかつらが現れる。それはハンカチと同じく真っ黄色だった。しかもかつらの毛は、もじゃもじゃともつれあい盛り上がっている。司法関係者がかぶっているかつらが乱れに乱れた様を英国の読者は想像するだろう。少女アリスが櫛があればとかせるでしようにと常識的なお節介を焼いたところ、comb を honeycomb とスズメバチは解釈し混乱が生じる。だがそのまま話は発展することなく、スズメバチはかつらを着用するに至った間抜けな経緯を（アリスの要望に応じて）詩にうたって語り始める。

それによれば、若かりし頃のスズメバチの頭には、頭上高くくるくる巻き上がるぐらいたっぷりと髪の毛が生えていた。ところが、そんなくるくる巻き毛は剃ってしまえよ、かつらをかぶりなよと周りから言われ、その気になって言われた通りにスズメバチは髪の毛を剃った。だが世間は無情で無責任。お前さんのかつらはわたしらが思ってたより似合わないねと冷たい。それじゃあとまったって、髪の毛は無い。もう生えてもこない。かつら着用は必至となった。スズメバチがその不格好さからブタ呼ばわりされたあげく見えてきたのは、周囲のみんなはブタのかつらという言葉が言いたさに頭を剃れ剃

れとけしかけた、それが本当のところという無惨な真実であった。

アリスは詩を聞いて気の毒にと同情するが、スズメバチから「あんたのかつらはよく似合っておる」と言われ、あげくに「あんたの顎は、形がよろしくない——それでうまく噛めるのかね」と言われたりもして、けたけた笑いだしたくなった。空咳でごまかして、噛みたいものは何でも噛めますとかわす。スズメバチは、アリスの髪<sup>33)</sup>の毛(かつらと思いこんでいる)、頭の形、顎の形を槍玉にあげていき、あまつさえ目の位置と数までをあげつらうのでアリスは甚だ気分を害する。しかしスズメバチが元気を取り戻したからこそ、憎まれ口も叩けるのだ。そうアリスは考え直し、スズメバチが元気になったのなら自分は暇を告げ小川を越えてもいいだろう。寄り道のおかげでちょっと時間をロスしたけれども、“...to making the poor old creature comfortable.”に寄与したことに満足感を味わいながら再び小川の岸辺に立つ。そして「やった、8 桁目だ」と「鏡の国」にある通りにつながっていくのである。

スズメバチの挿話には3点、浮き彫りにすべき要素がある。そのうち二つは、スズメバチの挿話が削除された理由に該当してもおかしくない特長だ。まずアリスとスズメバチの出会いが(例えばチェシャ猫との遭遇[「不思議の国」]等に比べて)至極平凡な動機に導かれている点である。これはまことに鏡の国的でない。技が欠けている。アリスは背後から聞こえたため息が不幸を嘆き悲しんでいるように響いたから、力になれるかもしれないと、目的を一時棚上げにして森へ戻った。人道的でかつ凡庸なこのきっかけは、キャロルが人道主義的でありながら往々にして偽善的な教訓詩をパロディー化する柱に添わないのである。ただしかつらをかぶり、鮮やかな黄色のハンカチで頬かぶりするスズメバチの姿自身を、馬鹿正直者のパロディーとみなすこともできる。主人公はいつの時代にもどんな社会にもいかにもありそうなおろか者で、世間を相手のだまし合いに破れたにすぎない。こういった単純な敗者は、伝承童謡の主人公としては成り立たない。伝承童謡の主人公には、神

秘的なノンセンスの高みにいてもらわないと困るからである。一つだけ確かなことは、他人の不幸を見て見ぬ振りのできない博愛主義的なアリスの光がスズメバチをも照らすことを止めなかった点である。

また、動機が平凡だったから、出会いも経過も平凡になったという必然的な特長もある。スズメバチは愚痴をこぼすばかり、わざわざ足を止めてくれたアリスに対してもときにひどく攻撃的になる。老人が老人であることを少女に向かって嘆く展開は、芸が無さすぎる。甥に筆先が鈍っていると疑われても、<sup>34)</sup>ちっとも面白くなかったとけなされても<sup>35)</sup>仕方がない。

最後にアリスの性格に破綻のないことは、特筆すべきである。8 桁目を目前にしてアリスは帝王学の最後のレッスンを受けた。女王（バチ）たるもの、その地位についた暁には、社会の風当たりが強くて寒い側にいる老人（スズメバチ）を思いやり、民の一人ひとりに分け隔ての無い態度で望まなければならないのである。そのような使命感はアリスに持たされていたのではない。キャロルがその使命感を代わりに持ってアリスを描き続けたのだった。1887 年 4 月に *The Theatre* へ寄稿した “Alice on the Stage” の中で、キャロルはアリスの性格を次のように定義している。<sup>36)</sup>

...Loving, ...and gentle...courteous to all, high or low, grand or grotesque, King or caterpillar, even as though she were herself a King's daughter...trustful...curious...

スズメバチの挿話でも、アリスはこの条件を満たしている。情愛豊かで礼儀正しく辛抱強い。芋虫をグロテスクなスズメバチと、王の娘を女王と入れ替えればそのままである。アリスが振り向いたのは、好奇心のせいもあるだろう。挿話の中のアリスは「アリス」2 冊全編のアリス像を裏切ることはない。スズメバチの挿話が採用されていて、しかも他の挿話と破綻なく調和していると読者の評価を受けたと仮定したら、その功績は 7 歳半にしては堂々たるキャロルの王女アリスに帰せられただろう。限界は、キャロルの描くアリスのイメージが、小文の 2 章で紹介したマナー読本をマスターした少女で

ある点だ。キャロルの破壊的なパロディー化は、あたかもキャロルがヴィクトリア朝の諸々の制約から解放され神をも恐れぬメンタリティーの持ち主であるかのような錯覚を持たせる。しかし彼が描いている少女は、そして物語を聞かせた少女は、1世紀半以上に渡って子どもにはかく教えるべしということをしっかり教わって身につけた少女なのである。その意味では、世代こそ老人と少女と大きく隔たっているものの、スズメバチ老人が歩んできた道とアリスのそれとはさほど異なった次元に続いているのではないのである。

#### (4) スズメバチ退治

スズメバチの挿話には、詩のパロディー化が与える衝撃は無い。伝承童謡を尊重し更に重層的に保育室の常連のイメージをふくらませていく紡ぎ跡も無い。他の章ではパロディーと伝承が新旧の快い調和を示しているのに比べ、本挿話は、小文で見てきたようにアリスを際立たせるだけの効果しか上がっていない。言葉遊びは散見できるものの、それとて異言語圏の読者にはともかく当時の読者にとって知的好奇心をかき立てるレベルには達していない。

キャロルは、突拍子もない哲学や信念を抱え込んでいるもの達を「登場人物」として配した。そのもの達にパロディーを無遠慮に声高に歌わせ、「今までの見方」を壊す容易さを示し「もう一つの見方」を呈示した。一方で伝承童謡の人気者達をファンタジー・ランドに招いた。しかし伝承の重要な手である子ども達を安心させ、子ども達が抱き続け伝えていくべき本質には決して破壊の手を伸ばそうとしない姿勢を買いた。これらの全てをどう感じるか、読むという体験を経てどう分かち合うかは、アリスが示す反応の一つ一つ、アリスがその都度発する疑問の一つ一つ、アリスの驚き、アリスの抗議、アリスの拒絶、そしてアリスの受容を読んでいくことによって分かってくる。

スズメバチとの遭遇の前に、アリスは白の騎士と出会っている。どちらも

老いて無惨な勘違いを露にし、頓珍漢な振る舞いに及ぶが、行動様式を比較すると、白の騎士のほうが遙かに豊かな想像力の産物である。スズメバチの挿話を挿入していれば、8章だけが他の章と比べて長くなるという物理的な(あるいは美学的な)理由もあって削除されたのかもしれない。ただ「鏡の国」には10章や11章のように極端に短い章もある。揃った長さは決定的な削除の理由ではなかったはずだ。ただし8章でどちらかの挿話を削除しなければならないとすれば、ノンセンスのレベルから見て、白の騎士が選ばれ、スズメバチが捨てられるのは当然である。

テニエルはスズメバチの挿話を「おもしろくない」と断言している。陰気で哀れっぽい老人が二人も続けて登場する。どちらももたもたと行動し、どちらもくどくどと自分勝手に喋りまくる。もっとも自分勝手なお喋りは不思議の国や鏡の国の住人のアイデンティティであるからそれは仕方ないとしても、男性の老人二人の連続した登場にテニエルは飽きたのかもしれない。かつらをかぶり頬かむりしたたスズメバチは、素人考えでは絵になりそうだが、テニエルは絵にできないと否定的だ。どんなに趣向を凝らしても、老いが薄煙となって立ち昇ってきそうな絵ばかりが並ぶ児童文学に華を画家は見なかったのだ。そして前述したテニエルの手紙によって、キャロルは削除を決定した。2冊の「アリス」に力を与えるパロディーも無く伝承も無いこの挿話は、壊れやすい巢にすぎなかった。スズメバチは退治された。

## お わ り に

キャロルがなぜ8章でわびしいスズメバチ老人を描いたのか。実在のアリスと、チャールズ・ラトウィッジ・ドジスン先生の年齢差が、「アリス」の様々な箇所では影響を及ぼした要因として挙げられることが多い。ロマンティックなようでいてそうでなかった二人の関係ゆえに、とりわけ取り沙汰されるの<sup>37)</sup>だろう。「不思議の国」の原話である「地底の国のアリスの冒険」の元になっ

たお話を語って聞かせた1862年に少女アリスは10歳、キャロルことドジスン先生は30歳であった。その後母親は、娘を先生に会わせたがらなくなった。「鏡の国」を出版したとき、アリスは19歳、ドジスン先生は40歳目前だった。贈り物は、もし「鏡の国」がアリスへの贈り物であるとすれば、それは送り主には手の届かないところにいる受け取り主に捧げられたわけである。

人口に膾炙したこの「理解」を解いていけばこうなる。アリスが女王に近づくにつれて(アリスが美しい女性に成長していくにつれて)、一度小川を越えてしまえば(アリスが結婚すれば)その変わりようは決定的だという思いは募っただろう。確かに己を省みて遠くない先にある老齡の悲哀に胸が塞がれただろう。

しかし、白の騎士やかつらをかぶったスズメバチは、そういう精神状態の産物だろうか。「アリス」文学が、他ならぬ作家の悲しみを晴らしその精神を解放したのなら慶賀の至りであるが、果たしてそうだったのだろうか。白の騎士は、妄想、奇癖、そして絶対的無知が旗印の老人だ。騎士道であれ何であれ、何に勤しもうと最後に支配者となるのは老いなのだ。白の騎士は「これも(あれも)わしの発明なのだ」といたくご自慢でハッピーだ。騎士の面目を失ったときに初めて得た充足感かもしれない。それを与えたのは老いだ。ここでは騎士がそして老齡がパロディー化されている。白の騎士の老人振りは、鮮やかだ。白の騎士は疑いもなくキャロルのペンから生まれた。

スズメバチは愚痴る道化、芸無しの道化にすぎない。アリスへの未練という針でちくちく刺しまくるスズメバチを退治するために書いたとしたら、挿話に迫力のあるパロディーが無いのも当然、童唄の応援が無いのも当然である。ドジスン先生は本当に胸の内で暴れ回るスズメバチを挿話の誕生という形で外へ出したのかもしれない。そうだとするとそれはドジスン先生のペンから生まれたものだ。ドジスン先生が誕生させたスズメバチは、さっさと退治された。テニエルの「おもしろくない」はすばらしい一言だった。これでよかったのである。挿話は削除されたが、挿話は使命を担わされていた。そ

の使命が果たされた。これで、ルイス・キャロル作『鏡の国のアリス』は、ドジスン先生が顔を出す余地のない名作として、不滅の生命を保ちつづけることができるようになったのである。

---

**Notes :**

- 1) *The Wasp in a Wig*, 12, "...The omitted chapter introduced a wasp in the character of a judge or barrister..." 'Preface' by Martin Gardner, Macmillan London Limited, 1977.
- 2) *Ibid.*, 16.
- 3) H. Carpenter & M. Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature*, 521, OUP, 1984.
- 4) *Ibid.*, 'Preface,' 13.
- 5) *Ibid.*, 13.
- 6) J. Fleming (Manhattan rare book dealer), N. Armour Jr., (New York City), P. Jaques and E. Christie, Trustees of the Estate of the late C. L. Dodgson.
- 7) The annotator of *The Annotated Alice*, Clarkson N. Potter Inc., 1960.
- 8) *The Wasp in a Wig*, 14-16.
- 9) *Ibid.*, 38-40.
- 10) Lewis Carroll, *The Complete Illustrated Works of Lewis Carroll, Through the Looking Glass*, 142, Chancellor Press, London, 1982.
- 11) *Ibid.*, 143.
- 12) *Ibid.*, 149.
- 13) J. Garreston, *The School of Manners or Rules for Children's Behaviour, at Church, at Home, at Table, in Company, in Discourse, at School, abroad, and among Boys*, Chapter 1, 1701.
- 14) *Ibid.*, Chapter 6.
- 15) M. Gardner, *The Annotated Alice*, 85, Penguin Books, 1979.
- 16) Lewis Carroll, *op. cit.*, 60.
- 17) *The annotated Alice*, 141.

- 18) Lewis Carroll, *op. cit.*, 98.
- 19) M. Gardner, *op. cit.*, 141.
- 20) H. Carpenter, *Secret Gardens*, 68, Houghton Mifflin, Boston, 1985.
- 21) I. and P. Opie, eds., *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 418, OUP, 1951.
- 22) *Ibid.*, 213.
- 23) *Ibid.*, 269.
- 24) *Ibid.*, 397.
- 25) Carroll, *op. cit.*, 69.
- 26) Opie, *op. cit.*, 398.
- 27) Carroll, *op. cit.*, 213-4.
- 28) *The Wasp in a Wig*, 28.
- 29) *Ibid.*, 29.
- 30) *Ibid.*, 29.
- 31) *Ibid.*, 30.
- 32) *Ibid.*, 32-33
- 33) *Ibid.*, 37.
- 34) *Ibid.*, 12.
- 35) *Ibid.*, 16
- 36) M. Gardner, *op. cit.*, 25.
- 37) Lewis Carroll, *Alice's Adventures under Ground*, 1863.